

〔追悼〕

追悼 山下太郎先生

平成22年1月8日、入院されていた所沢の病院で、山下太郎先生が息を引き取られた。享年93歳。同月15日と16日、晩年奥様と住まわれていた横浜で、葬儀がしめやかに取り行われた。告別式には、静岡大学人文学部長をはじめ幾人もの静大の教え子たちが参列し、これまで先生がどれ程静岡大学の発展に貢献し、どれ程多くの優れた人材を輩出してきたのかが、改めて思い起こされた。

山下太郎先生は、大正5年に山梨県に生まれ、東京帝国大学文学部国文学科に入学、その後同学部哲学科へ転科し、哲学科を首席で卒業された。昭和15年4月、北海道帝国大学予科講師に招聘された先生は、同年12月高射砲兵として中国山西省に出征し、昭和20年9月に北海道大学に復職した。5年近くに及ぶ戦争体験が先生の実存的なエートスに深い彩りを与えていたことは疑いない。また、このときの体験が後の『哲学と人生——戦争を通しての思想と哲学』を著すきっかけとなったのでは、と推察される。さらに、同大学助教授を経て、昭和22年静岡高等学校（現静岡大学）教授に就任。昭和55年静岡大学を定年退官、常葉学園大学を経て、昭和58年4月から61年11月まで、日本大学文理学部・同大学大学院文学研究科に教授として、さらにその後も非常勤講師として勤務された。

日本大学に移られた頃の先生は、静岡大学の時のような厳しさは影を潜めていたものの、学生と学問とに対する情熱は少しも衰えることはなく、学会では決まって初めから最後まで最前列に陣取って、ほとんどすべての発表者に対して質問をされていた。また、当時恒例となっていた夏のゼミ合宿を欠かすことはなく、愛車のBMWで、軽井沢や那須塩原などをドライブされている間も、終始立て板に水で、先生の居るところ学問の話題が尽きることはなかった。個人的に忘れられないのが、ドイツから帰国した

ばかりの筆者に、原文で千ページにも及ぶヤスパースの『真理について』を一緒に読もうと、提案してくださったことである。2週間に一度、最上階の12階にある先生の研究室で、当時まだ翻訳のなかった部分も含めて、1年以上に亘りマンツーマンでご指導をいただいた。筆者の翻訳や解釈の誤りについてその都度ご指摘くださり、ブレイクタイムを入れて、研究指導が4時間以上に及ぶことも少なくなかった。

学問への先生の興味は、ヤスパース同様、いわば固有の根源に基づく開顕性に支えられており、その学問的広がり、まさしく驚嘆に値するものであった。比較思想学会評議員をはじめ、所属学会は十以上に及び、日本カント協会役員、イギリス哲学会理事などを歴任された。また、先生には北欧神話や日本神話に関する著作もあり、その知的好奇心は西洋哲学のみならず、世界中の神話にまで及んだのである。しかしながら、看過できない先生の業績として、昭和41年に理想社から出版された『人間学』（カント全集14巻）の翻訳を挙げなければならないだろう。元々ヘーゲル研究からはじまった西洋哲学への先生の問題関心は、カントへの敬愛の念と開かれた理性に導かれつつ、晩年はキルケゴールやニーチェに傾いていったように思われる。

科学哲学会や実存思想協会にも所属していた先生は、平成2年縁あって、東京帝国大学時代から尊敬しておられた鈴木三郎先生が理事長を務める『日本ヤスパース協会』の理事に迎えられた。その後、日本ヤスパース協会第7回大会で「実存哲学と社会——ヤスパースを中心に——」という題目で講演され、さらに第9回大会では、「ヤスパースと現代」というシンポジウムのパネリストとして活躍された。病気のため協会の活動を退かっていた先生を所沢の病院にお見舞し、先生が協会顧問に推挙されたことを告げた時の先生の笑顔を、今でも忘れることはできない。ここに、先生のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

日本大学教授 平野明彦